

Title	多元的現実としての主婦への社会学的アプローチ： 主婦像と女性のアイデンティティをめぐって
Sub Title	
Author	國廣, 陽子(Kunihiro, Yoko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1997
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.46 (1997.), p.52- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000046-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の解剖学的基盤が他の皮質への異所投射であることを示唆するものである。もちろん、視覚皮質以外の、たとえば体性感覚野への投射が検討されていないといった問題点がないわけではないが、行動上の機能回復を解剖学的に裏付けた成果は極めて高く評価できる。

また、本当に視覚皮質が聴覚機能を代替しているなら、幼体で聴覚皮質摘除を受けた成体で視覚皮質を摘除すれば回復していた聴覚機能がふたたび失われるはずである。この実験はおこなわれていないが、将来の計画としては是非望まれるものである。

社会学博士（平成9年11月5日）

甲 第1587号 國廣 陽子

多元的現実としての主婦への社会的アプローチ
——主婦像と女性のアイデンティティを
めぐって——

〔論文審査担当者〕

主査 慶應義塾大学メディア・
コミュニケーション研究所教授
大学院社会学研究科委員

Ph.D.

岩男寿美子

副査 慶應義塾大学文学部教授・
大学院社会学研究科委員
社会学博士

青池 慎一

副査 東京女子大学教授
社会学修士

矢澤 澄子

（内容の要旨）

本論は、1987年以降筆者が取り組んできた一連の調査データに基づいて、現代社会に生きる女性の性役割の状況を主婦という視点から考察し、主婦というカテゴリーが女性にとってのもつ現代的意味を検討するものである。国際女性年（1975年）、国連女性の10年（1976～85年）を画期とした日本社会の転換期を「主婦」と自認し、あるいは「主婦」とみなされながら生きてきた女性の生活スタイルや生活意識、自己アイデンティティの揺らぎとその克服を、とくにライフスタイル第Ⅲ期（子育て解放期）に焦点を当てて考察する。

本論文の目的は大きく分けて二つある。ひとつは、性別役割分業システムとしての都市システムにおいて、主婦としてこのシステムに組み込まれて生きる女性の実態

とアイデンティティの解明である。いま一つは既婚女性の代名詞として流通している主婦というカテゴリーが、マス・コミュニケーション過程を通じてどのようにイメージ化され、女性のカテゴリー化装置として作動するかについての解明である。前者は、ジェンダー視点の導入によって社会学、とりわけ現代都市論において蓄積されている女性研究に連なるものである。また後者は、マスメディアが、ステレオタイプ化した女性イメージの再生産を通じて社会の性差別構造を維持・再生産・強化するというメディア批判論の発展をめざすものである。制作者の「常識的知識」としての主婦像が、テレビの現実として具体化していく過程を解明し、テレビにおける主婦ステレオタイプ表現の生成過程を明らかにする。マスメディアに媒介された現実認識が不可避である現代人にとって、アイデンティティ形成とメディア・イメージは不即不離のものであり、この二つのねらいは、主婦概念の今日の意味と主婦という社会層の可能性を考察する上で表裏一体となっている。

論文は序論を含む6部構成となっている。以下、各章の内容について概略を記す。

序論

まず、本稿での主婦を「性別役割分業規範に基づく性役割として、家事・育児・介護などの生命再生産活動を無報酬で主に担うことを自明視された女性」と操作的に定義し、本論に入る前に、女性というカテゴリーの誕生とこのカテゴリーの構成内容の歴史的变化を概観する。戦後の経済成長期に進行した男性の「総サラリーマン化」と女性の「総専業主婦化」に注目し、女性の主婦化の確立期を経済成長期（1955～75年）とみることを確認する。

次に都市女性としての主婦を論ずる上での4つの視角を設定し、各々の視角について説明する。4つの視角とは(1)女性のリアリティとしての主婦（都市に生きる女性が構成する生活世界の現実としての主婦）、(2)女性のアイデンティティとしての主婦、(3)女性のイメージとしての主婦、(4)女性の主体像としての主婦、である。(1)「女性のリアリティとしての主婦」とは、主に都市社会学の領域で研究される、都市的生活様式における女性の「主婦的状况」を指す。それは、世帯内における家事・育児・介護活動の担い手としての側面と、労働市場における周辺化された労働者としての側面、地域社会の活動参加におけるジェンダー拘束性（地域の「主婦化」という3つ側面である。これら3つの側面に共通する「主婦的状况」を都市女性がどのように打開していく

ことができるのか、というのが本論の基底を成すテーマである。

(2)「女性のアイデンティティとしての主婦」とは、女性の自己定義にとって自明視されてきた主婦というカテゴリーに揺らぎが生じている事態に注目する視角である。「主婦である」ということ（主婦というカテゴリーに帰属すること、類別されること）が安定した自己の存在証明とはならない中で、女性は不安定なアイデンティティ状況をどのように克服していくのか、その際行われるアイデンティティ管理やアイデンティティ操作の実態と可能性、限界を検討する。

(3)「女性のイメージとしての主婦」とは、生活実態や主婦役割に関する価値意識の揺らぎだけでは捉えきれない主婦アイデンティティの揺らぎの原因やその回避を、イメージ化された主婦像の中に探ろうとする視角である。都市女性の抱く否定的主婦イメージの実態と、マスメディアが描くステレオタイプ化された主婦像との循環的關係をとらえ、ステレオタイプ化したイメージとしての主婦像と、女性の「主婦的地位」の克服との関係を考察する。

(4)「女性の主体像としての主婦」とは、女性の主婦的地位の克服を個人的な解決手段によってではなく、社会変革を通じて行うべく、政治的意思決定過程に参画する都市女性の積極的な動きに注目する視角である。都市女性が主婦的地位を自覚的に捉え、自己変革を通じて社会変革の主体となる可能性とその際克服すべき課題を論じていく。

1章から5章は、それぞれの視角に対応する(3章・4章はともに「女性のイメージとしての主婦」を扱い、5章で主体像としての主婦を論ずる)。

第1章 生活世界におけるリアリティとしての主婦 ——「主婦意識調査」の結果から(その1)——

80年代以降の「都市的生活世界」における女性の主婦としての経験を概観した上で、ライフスタイル、ライフコースの「主婦的地位」を、女子大学生の母親を対象に実施した調査(「主婦についての意識調査」)結果に基づいて具体的に検討する。そして、「主婦的ライフスタイル」とは、世帯内で家事・育児・介護などの「主婦役割」を担う一方、パートタイマーとして労働市場での「主婦役割」を担う「主婦的労務スタイル」をとることに端的に見られるような自己調整的ライフスタイルであることを明らかにする。

「主婦とは、ライフスタイルについての生活上の時間配分を、自分中心に行うか家族中心に行うかについて、

常に自らに問いかけ、また他者からもその選択結果を呈示するよう求められ続ける存在」である。こうしたライフスタイルの背景には、夫と妻との利用可能な個人的資源のギャップがある。性別役割分業システムとしての都市システムは制度的誘導を伴って育児期の女性に就労中断をせまり、育児期の女性を「無職の母」(「専業主婦」)へと水路づけ、結果的に、再就労の条件を低く抑えている。

しかし、主婦的労務スタイルは、就労時間や就労形態を自己選択するという意味では、オルタナティブな働き方への可能性も持っている。

第2章 主婦アイデンティティの多元的構成

——「主婦意識調査」の結果から(その2)——

2つの調査(高学歴都市女性30名へのインタビュー調査と、女子大学生とその両親を対象にしたアンケート調査、各327名)の調査結果に基づいて、主婦アイデンティティの実態を、特に主婦アイデンティティの揺らぎの事例に注目して検討する。女子大学生の母親で、主婦アイデンティティを否認する者は1割に満たないが、「どちらともいえない」と留保する者が約1割いる。「無職の母・妻」(「専業主婦」)でありながら主婦アイデンティティを留保する7名の女性と、妻が無職であるのに主婦とカテゴリー化するのをためらう夫5名を比較しつつ、それぞれの主婦カテゴリーの構成内容や、家族間の主婦カテゴリー化についての推定を詳しくみる。

就労形態と主婦アイデンティティの採用には関係が見られるが、主婦アイデンティティは就労形態だけでは説明できない。就労化によって女性が「主婦でなくなる」傾向もあるが、就労している女性の多数派は自己定義として主婦を採用している。また家族が主婦とみなすよりも、本人が自分を主婦とみなす比率の方が高くなっている。自己定義として主婦を採用する場合でも、肩書としての主婦は否定する場合もあり、その逆もあるなど主婦カテゴリーの構成内容は重層的で、主婦アイデンティティは多元的である。

世帯内の生命再生産活動の主な担い手でありながら「主婦ではない」と否認することで「主婦的地位」を個人的に隠蔽し、潜在化させる場合もある。性役割の象徴的存在としての主婦を嫌い、主婦アイデンティティを否認する女性の増加が、女性の主婦的地位を変えることに繋がらず、「専業主婦嫌悪」「主婦差別」に陥る可能性もある。

第3章 イメージとしての主婦

——「主婦意識調査」の結果から その(3)——

主婦とは、女性の社会的地位や特定のライフスタイル、役割を指すだけでなく、女性についてのステレオタイプ化したイメージでもある。「主婦意識調査」の結果からは、主婦アイデンティティと肯定的・否定的主婦イメージの相互関係が見いだされた。否定的主婦イメージをもつ人には主婦アイデンティティを否認する人が多く、肯定的主婦イメージをもつ人には主婦アイデンティティを自認する人が多い。だが否定的主婦イメージをもちながら主婦をアイデンティティとして採用している女性もいる。これらの人びとについては事例として詳しく検討した。

主婦という言葉の連想語から、主婦イメージの具体的な内容をみると、「良妻賢母」(6割弱)が最も多い。主婦に否定的イメージをもつグループでは「井戸端会議」「三食昼寝つき」が上位にあり、主婦の否定的イメージの核心に、時間的余裕を無為に過ごす「専業主婦」イメージが根強いことが分かる。

典型的な主婦像として想起されるのは、自分の妻や母親であることが多いが、それは妻や母が無職の場合に限られ、肯定的イメージと繋がっている。妻や母が就労している場合は妻・母を主婦とみなさないことから、既婚女性の就労が進んでも(むしろ進むほど)、主婦像は「専業主婦像」としてステレオタイプ化され、否定的イメージに繋がっていく。「典型的な主婦」は性役割規範に従順な女性としてイメージ化されており、その外見や行動内容は、ステレオタイプ化され、現実の既婚女性の行動や外見とのギャップがある。

ステレオタイプ化した否定的イメージとしての専業主婦像と理想化された良妻賢母像が主婦イメージの中核に存在し、両極化した主婦イメージ(専業主婦のステレオタイプ)に捕縛され、アイデンティティの閉塞状況に陥る女性がいる。

第4章 テレビが描く主婦像

——テレビ番組の内容分析と制作過程の参与観察から——

テレビドラマでは、登場人物の外見や行動はすべて一定の意図をもって構成されているため、主婦イメージの構成は、テレビドラマに登場する主婦像によって確認できる。第4章では、内容分析の手法により、学校放送番組道徳ドラマに登場するおとなの登場人物(372名)の特徴を把握し、「主婦」として描かれた女性と、教師として描かれた女性の外見や行動を比較することで、マス

ディアの送り手集団の構成する主婦像の特徴を析出する。小学生を対象に放送された100本のドラマに登場した母親は、ステレオタイプ化した性別役割分業型家族での「専業主婦」が多い。

このようにステレオタイプ化した専業主婦像が多く描かれる要因については、筆者が行った番組制作過程への参与観察調査にもとづき、制作集団のジェンダー構造に注目して検討する。

ドラマのわき役の人物像構成における社会的カテゴリーの自明視、教育番組の制作スケジュールや予算の制約等の構造的要因、制作者集団のジェンダーの偏り、制作現場における当事者としての「主婦」の不在、などが制作段階の各レベルで相互的に関連し、積極的な意図を欠いたままステレオタイプの主婦像がテレビの現実として構成されることがあきらかになる。

第5章 主体像としての主婦

イメージとしてのステレオタイプ主婦像の拘束を打破し、ライフスタイルの主婦的状况を乗り越え、女性を主婦的存在へと誘導する社会システム全体を変えていく「主婦」(主体としての主婦)を検討する。事例としては、80年代以降の女性の政治参加の新動向のなかで、「主婦の政治参加」として注目される「代理人運動」をとりあげ、運動参加者のアイデンティティ分析を行う。

性別役割分業に規定され主婦としての生活を担うなかで、環境汚染や食品添加物、エネルギー危機や資源のリサイクルの重要性を自覚した主婦が、そうした生活課題を政治の場で解決しようと自分たちの仲間の中から候補者を選出し、議員に白紙委任しない「代理人」というシステムを通じて政治参画を行っている。筆者らが実施した代理人運動参加者(会員と代理人層)を対象とした調査(1991年)と、代理人運動参加者とその夫の調査(1995年)、また参与観察やインタビューの結果に基づきながら、運動参加者が、運動へのコミットメントを深化させるに伴い主婦アイデンティティを再定義していく様子をあきらかにする。運動参加者の多くが、ライフステージ第III期にあり、主婦の状況の悩みや、主婦アイデンティティの揺らぎを経験し、主婦の状況の克服を模索している。

男の聖域とされてきた政治の場に女性が進出するには、性役割の拘束を打破する困難が予想されるが、生活課題の政治化から政治参加のステップを歩み出した運動参加者にとってハードルは比較的低い。また、サラリーマンの夫に経済的に依存する生活、就労機会が少ない大都市郊外居住、ライフステージ第III期の時間資源の豊

富さなどの主婦の状況が、政治参画に必要な資源提供の基盤となっている。

主婦であるゆえに政治参画が可能になっているパラドクスを背負いながら、政治参画によってミクロレベルでの主婦の状況を変革し、また、マクロレベルでの主婦の状況の変革（社会層としての主婦の解体）をめざす主体としての主婦の可能性を、具体的な活動体である神奈川ネットワーク運動の事例で検討する。

女性は主婦という社会的地位を媒介にして近代的価値と振じれた関係にある。近代的個人としての自立は「非主婦的存在」への志向と重なりやすい。個人的に主婦の状況から抜け出すことによってではなく、主婦であって主婦でない引き裂かれたアイデンティティを引き受け、自己の存在形態を否定しつつ、肯定的な自己アイデンティティの物語を紡ぎだすような運動のありかたを模索する必要がある。そして、女性を主婦化する社会は同時に男性の生き方をも拘束するものであるとの自覚が男性にも広がったとき、ジェンダー・センシティブな男女共生への道も具体的にひらかれる。各地の多様な男女の草の根レベルでの運動は、ネットワークによるゆるやかな連帯によって主婦化に対抗的な力を発揮することが課題となろう。

論文審査の要旨

國廣陽子君の学位請求論文「多元的現実としての主婦への社会的アプローチ—主婦像と女性のアイデンティティをめぐる—」の構成は、次の通りである。

まえがき

序論 主婦を分析する視角

1. 「主婦の誕生」と女性の主婦化
2. 女性のリアリティとしての主婦
3. 女性のアイデンティティとしての主婦
4. 女性のイメージとしての主婦
5. 女性の主体像としての主婦
6. 調査概要

第1章 生活世界におけるリアリティとしての主婦

1. 主婦のライフスタイルとその問題点
2. ライフスタイルの多様化と拘束
3. 主婦的ライフスタイルの実態——女子大学生の母親調査の結果から
4. 主婦的ライフスタイルの可能性

第2章 主婦アイデンティティの多元的構成

1. 主観的アイデンティティとしての主婦
2. 客観的アイデンティティとしての主婦

3. 自己定義と主婦カテゴリー化

4. 主婦と女性の自己定義権——結論にかえて

第3章 イメージとしての主婦

1. 主婦についての肯定的イメージ・否定的イメージ
2. 主婦イメージの具体的内容
3. 主婦のステレオタイプ・イメージ
4. 主婦イメージの解体と再構築

第4章 テレビが描く主婦像

1. テレビが描く主婦像へのアプローチ
2. テレビの現実としての主婦像——学校放送番組の内容分析
3. 主婦像構成の現場——番組制作過程の参与観察
4. メディアにおけるステレオタイプとしての主婦像構成の規定要因

第5章 主体像としての主婦

1. 女性と政治の今日
2. 都市女性の政治参加と「代理人運動」
3. 代理人運動参加者のアイデンティティ分析
4. 主婦の政治的主体化の課題

概括

本論文は、著者自身が解決をせまられていた問題への個人的かかわりから出発したきわめてユニークな論考である。著者は、男女平等の理念にもとづく教育制度のもとで男女共学大学に学び、制度上は明文化された男女差別のない職場に勤め、同僚と結婚して2児をもうけ、育児による退職を「やむをえない」現実として自己選択した経歴をもつ。しかし、自己選択による就労中断の結果、希望する再就職はできないきびしい現実のなかで自分が「主婦」とカテゴライズされることに衝撃を受け、結果的に自分の選択の責任から逃れられないことに気づくことになる。

そうした体験の過程で、「個人的な問題は社会的な問題」というフェミズムのテーゼに深い共感を覚えた著者は、なぜ自分が主婦的状況を「自己選択したのか」を客観的に洗い出し、女性の共通体験としての主婦の意味を理論的・実証的に問い直そうとした。これが著者のそもそもの問題意識である。

ミクロレベルの問題をほぼ10年を費やして一連の多角的研究に発展させてまとめあげられた学位請求論文からは、著者の力量と熱意が十分に窺え、著者の軌跡と業績は、引き裂かれたアイデンティティのなかに生きる女性たちが、性別分業システムに転換をせまる際のモデルとなりうるものである。著者の願いも、主婦的状況に対

する女性たちの共通理解を深めることで多様な連帯を形成し、主婦の状況の克服へとつなげることである。

序論で著者はまず「主婦」を「性別役割分業規範に基づく、性役割として家事・育児・介護などの生命再生産活動を無報酬で主に担うことを自明視された女性」と操作的に定義し、主婦というカテゴリー（主婦概念）の誕生とその構成内容の歴史的变化を概観している。その上で主婦を総合的に分析するための4つの視角を設定した。すなわち、(1)女性のリアリティとしての主婦、(2)アイデンティティとしての主婦、(3)イメージとしての主婦、(4)主体像としての主婦の4つである。1章から5章までの分析と考察は、これら4つの視角により解明された結果を、相互に関連づけながら展開されている。

第1章、第2章、第3章は、女子大学生とその父親・母親（各327名、計981名）を対象とし、それぞれ独自の調査票を用いて実施した「主婦についての意識調査」の結果に基づいている。

第1章と第2章では、性別役割分業システムとしての現代都市社会における女性のライフスタイルおよびアイデンティティの実態と問題点、さらにその克服の可能性を論じている。

まず第1章では、「主婦についての意識調査」の母親票の結果に基づき、団塊の世代を中心としたライフステージ第3期の主婦層のライフスタイルにおける「主婦的状况」について述べている。人生を自己決定しえない存在＝主婦として規定されながら、自立した個であらねばならない矛盾した現実のなかで、女性たちがライフスタイルの調整をしていることが確認された。

第2章は、高学歴女性30名の面接調査と、「主婦についての意識調査」の学生票、父親票、母親票の結果の詳細な分析から、主観の主婦アイデンティティと家族の認知（視線）とのずれを含む主婦アイデンティティの実態を検討している。そのうえで、主婦というカテゴリーのなかで、ライフスタイルの調整に応じてアイデンティティの調整（再構成）を行うことを余儀なくされる女性たちの、主婦アイデンティティの揺らぎの様相を明らかにしている。そして主婦アイデンティティの問題状況は、「自己定義権を剥奪されているアイデンティティの主婦的状况」であることを明確にしている。

第3章と第4章は、既婚女性の代名詞として流通している主婦カテゴリーが、マス・コミュニケーション過程のなかでどのようにイメージ化され、女性をカテゴリー化する装置として作動するかという問題を中心に展開されている。

第3章では、「主婦についての意識調査」の主婦イメージについての質問項目（学生票・父親票・母親票）の結果に基づいて、主婦とは女性の社会的地位や特定のライフスタイル、女性の性役割そのものを指すのみならず、女性についてのステレオタイプ化したイメージであることを実証的に示した。そのうえで、主婦アイデンティティがそうした主婦イメージに拘束されて生じる主婦ジレンマや、家族がもつ主婦イメージと現実の女性たちの行動や外見とのギャップが拡大している状況について検討している。

第4章では、ステレオタイプ化した主婦イメージの源泉としてメディアの描く主婦像に焦点をあてている。小学校1年から6年用に制作される5種類のNHK学校放送道徳ドラマ番組シリーズ100本に登場する成人372名の内容分析を実施し、これらの番組に登場する主婦と女性教師の外見や行動を比較して、送り手の構成する主婦像の特徴を捉えた。さらにドラマ制作現場で番組制作集団の言動を参与観察する独創的な研究を展開している。ここでは、制作スタッフのジェンダーやライフスタイルが番組で描かれる主婦像に反映する様子を追うことにより、ステレオタイプ化した女性像が描かれる原因を分析し、テレビに描かれる主婦像の問題点を明らかにした。

第5章では、4章までの分析で明らかになった多様な「主婦的状况」の困難や問題性を打開するため、主婦の主体化の可能性を実証的に検討している。対象としては、身近な生活課題の解決を目指して政治参画への道を歩みだした女性たちである「代理人運動・神奈川ネットワーク運動」の参加者を取りあげ、彼女たちのアイデンティティについて興味深い事例研究を行っている。著者は、こうした女性たちが、夫への経済的依存、就労難という状況におかれた主婦であるがゆえに可能になる政治参画を通じて、女性を主婦化する社会システムを変える、という矛盾をかかえていることを指摘し、この矛盾をいかに乗り越えるかが問題解決の重要なポイントであると述べている。そのうえで、彼女たちの行動が、主婦アイデンティティの揺らぎを政治的主体化に繋ぎ、幅広いネットワークを形成することによって、女性を主婦的存在に誘導する社会システムを変革する新たな可能性を開くものと展望している。

以上に概観した本論文は、実証的データに基づくミクロな分析を行う一方、女性を主婦の状況や存在へと誘導するマクロな社会的現実や制度、さらにこれらを変革する「主体」としての主婦の可能性にまで考察の射程を広

げている。このように、いわばミクロとマクロの社会的アプローチを体系的に関連づけて「現代日本の主婦」をめぐる問題を解明している点で、主婦研究・女性研究として高く評価できるものである。とくにテレビ番組制作現場における参与観察と、代理人運動の事例研究は、きわめてユニークなものである。

本論文には以上のような優れた特徴が認められる反面、分析がややもすれば記述的になりがちな点に若干の物足りなさが残るが、斬新なアプローチと多角的な考察は、ジェンダーの視点を明確にした実証的社会学研究に新しい分野を拓くものである。よって本論文は、博士(社会学)の学位を授与するに値するものと判断する。

社会学博士(平成9年11月5日)

乙 第3098号 李 光範

日本のニュース・メディアにおけるニュース・ソースに関する研究

[論文審査担当者]

主査 慶應義塾大学文学部教授・
大学院社会学研究科委員
社会学博士 青池 慎一
副査 東京大学社会情報研究所教授
法学修士 鶴木 眞
副査 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション
研究所教授・大学院社会学研究科委員
文学博士 萩原 滋

内容の要旨

本論文は、ニュースの生産過程に影響する社会的、社会心理学的影響要因を探求してきた「ニュースの社会学」といわれる研究の流れを背景に、ニュース・ソース(news source)というメディア外的要因が、マス・メディア以前から始まる一つの社会過程としてのマス・コミュニケーション過程において、どのような位置を占めているのかを探求することを通じ、「ニュースとは何か」、「ニュースとは何を意味するものか」について考察することを目的としている。本論文では、このような目的の下、ニュースの内容に影響する様々な要因に関する既存研究とニュース・ソースに関する既存研究を検討した後、日本のニュース・メディアを対象に、ジャーナリストとニュース・ソースとの相互作用、その相互作用の

結果として出される報道内容におけるニュース・ソースの分布および構成を分析することによって、ニュースというものがどのような社会的構成物であり、それが社会システムの構成員に対しどのような意味を持つものかについて考察を行っている。さらに、これまでのニュース・ソース研究ではあまり検討されることのなかったニュースの受容過程におけるニュース・ソースの影響についても分析を行い、ニュース・コミュニケーションの全過程のなかで、ニュース・ソースがどのような位置を占めるものかについて検討を行っている。

まず、ジャーナリストとニュース・ソースとの相互作用に関する分析においては、その相互作用を大きく規定していると考えられる日本の記者クラブ制度に対し検討を行うとともに、日本と韓国のジャーナリストを対象にした調査を通じ、日本のジャーナリストがニュース・ソースとの相互作用に対して持っている認識や相互作用の経験などを明らかにしようと試みた。

分析の結果から、日本と韓国のジャーナリストの間にはニュース・ソースとの相互作用において多くの類似点が存在していることが明らかにされたが、一方で両集団の間には注目すべき相違点があることも発見された。両集団は、事件や出来事に関する最初情報の確認先として、「事件や出来事の当事者」、「関連官公庁や機関」、「関連分野の専門家」をよく利用しており、取材源を見つける方法としては「自社独自の人物データ・ベース」で代表される内部情報探索よりは、「関連組織や団体」、「関連分野の専門家」、「関連官公庁」などへの問い合わせのような外部情報探索に大きく依存しているという点で類似していた。取材源選択基準に対する重要度評価では、取材源の真实性や専門性など「取材源としての理念的適切性」が最も重要視される傾向があり、「取材源との個人的な親交関係」、「取材源と自社との親交関係」、「取材源に対する個人的な好感」など、取材源との関係要因も比較的重要視されていることが明らかにされた。特に、「取材源との個人的な親交関係」は日本と韓国のジャーナリスト両集団においてかなり重要な選択基準として評価されていることが分かった。また、「距離・時間的に接近が容易であること」、「必要な時によく接触できること」など取材の利便性に関わる要因も、取材源を選択する際の考慮事項として比較的重要視されていたが、統計的に有意な違いはなかったものの、日本よりは韓国のジャーナリストがこれらの要因をより重要視していることが分析の結果から示された。取材源の選択基準に対する重要度評価において日本のジャーナリストと韓国のジャーナリス